因している。これは関東圏にも取材出かけた上で感触からの、筆者の推測にすぎないが、メディアの影響もあってか、関東圏、特に東京都中心においては、俗に言う「女子中高生」の援助交際女性の割合が多いように思われる。筆者は、東京へ取材に赴いたときに関東圏の「コギャル文化」[5]というものの存在を痛切に感じさせられた。東京都にある取材現場に、まさにコギャルといった格好で登場した高校生のユカリは、「女友達100人のうち、半数は援助交際をしている」と、筆者に語ってくれた。このような事態は関西圏では想像できないことである。このように自分が援助交際をしているという情報を多くの友人と共有する事態は、関西圏では考えられないからである。つまり関東圏のコギャル的文化の中では、援助交際を行うことやそれについて語り情報を交換することへの敷居は低いと考えられる。

また第三点目は取材方法についてである。筆者の取材方法が主に伝言ダイヤルを介して、取材相手を捜すというものであるためにいわば個別的に行われているのに対して、ここで取り上げた宮台氏の取材に限って言えば、テレビ局の番組制作のために、ある一人の情報提供者から人づてに取材相手を捜すという手法である。こうすれば、比較的同年齢の取材相手を捜しやすいと推測できる。またここから、筆者の取材が援助交際経験者で自発的に話そうとする意図をもった女性である点を特徴とすることを考えれば、筆者の調査事例の偏りも推測できる。「話したい」とか「誰かに自分の話を聞いてもらいたい」という動機をもちやすいのは、本稿で呈示した三類型で考えるならば、欠落系に属する女性であると考えられる。筆者のフィールドワークで得た事例において、本当に欠落系が多いかどうかは、援助交際女性の全数調査が不可能なため判断できない。しかしある程度、筆者の採用した取材方法が欠落系とここで類型化したカテゴリーの人々を誘引しやすい要素は指摘できるだろう。

それゆえ以上の三点の理由から、宮台氏の「お金は口実」派と「お金は必要」派との比率は三：七という分析と、筆者の欠落系と快楽系・バイト系との比率七：三という逆転に関しては、ある程度の説明は可能である。

4－3　買春男性への調査データとの比較

男性の買春経験[6]が25歳以上の男性では半数を超えるという現実[7]がある。女性を金銭で買ったことのある男性1157人は、その理由を次のように回答している。上位から順に挙げると、「刺激を求めて」(16.4%)、「生理的欲求として当然だから」(15.0%)、「売る人がいるから」(13.4%)、「家庭を壊したくないから」(9.4%) の四つの理由で、全体の半数を超えている[8]。この結果から推測できるのは、男性は買春に、性的欲求を充足することを求めているということである。つまり、「刺激を求めて」と「生理的欲求として当然だから」いう買春理由はもちろんのこと、「売る人がいるから」と「家庭を壊したくないから」という買春理由も、性的欲求を充足することを求めているとも読みとれる。なぜなら、金銭さえ支払えば性的行為に応じてくれる人がいるから買春するという「売る人がいるから」という理由も、その前提には女性との性的行為を求める男性の性的欲求が存在している。また性的欲求を家庭の中で充足できない状況の下で、家庭以外に性愛を表出できないという理由のために、いわばプロの女性に性的欲求を充足することを求めるという「家庭を壊したくないから」という理由にも、その前提に女性との性的行為を求める男性の性的欲求が存在していることが推測できる。つまり買春男性は、一般的に

5) コギャルとは、茶髪・ルーズソックス・ミニスカート・顔黒（ガングロ、顔が日に焼けて黒いこと）という外見をしている女子高校生の呼称である。

6) ここで言う買春とは、「お金を払ってするセックス（擬似セックス、マスターベーション援助などの各種性的サービスを含む）を意味」する［男性と買春を考える会　1998　p. 165］。

7) 「男性と買春を考える会」が1997年の８月から10月にかけて行ったアンケート調査（配布数２万部、回収数2502部）では、25歳以上の男性の買春経験は51.7%（1075部）、24歳以下も含めると46.2%（1157部）である［男性と買春を考える会　1998　p. 3］。

8) 以下は、「男同士の連帯感を強めるため」(6.3%)、「普段とは違う自分になれるから」(5.4%)、「パートナーがいなければやむを得ない」(5.2%) という順であるが、これに「その他」(13.2%) と無回答 (1.8%) に本文で挙げた上位四つの理由を含めると、全体の86.1%となる［男性と買春を考える会　1998　p. 16］。